

## 第2章 横浜水道のあゆみ

人口わずか数百人の小さな村だった横浜は、安政6（1859）年の開港を機に人口が急増し、海や沼を埋め立てることで居住地を確保していました。

居住地の大半が埋立地ということで、井戸を掘っても良い水が得られず、また、水はけも悪いことから、水不足への対応や衛生環境の改善が求められていました。



獅子頭共用栓

こうした状況を背景に、神奈川県は英国人技師H.S.パーマーを顧問に迎え、当時のヨーロッパの先進技術を取り入れた日本で最初の近代水道の創設に着手し、明治20（1887）年10月17日に給水を開始しました。

その後横浜水道は、関東大震災や第二次世界大戦の戦禍を乗り越え、人口の増加や給水区域の増大、産業発展に伴い急増する水需要に合わせて、水源開発と8回に及ぶ水道施設の拡張工事や工業用水道の整備を進めてきました。平成13年には、宮ヶ瀬ダムの本格稼働で、将来にわたり安定給水ができる水源と施設が整いました。

「拡張」の時代から「維持管理」の時代に転換し、現在は、老朽化した施設の更新や大規模地震に備えた耐震化、テロや水質汚染事故といった危機管理対策などを進めています。

平成26年には、川井浄水場を自然エネルギーを活用した国内で最大規模の膜ろ過方式の浄水場に再整備しました。

また、市内を一周する「大環状線」が構想から四半世紀の歳月を経て全線が完成し、主要な送配水管と大環状線を組み合わせることで、送配水機能とバックアップ体制の大幅な強化が図られました。

給水人口7万人からスタートした横浜水道は、市勢の発展とともにあゆみ続け、現在では、370万人を超えるお客さまに24時間365日安全で良質な水をお届けしています。



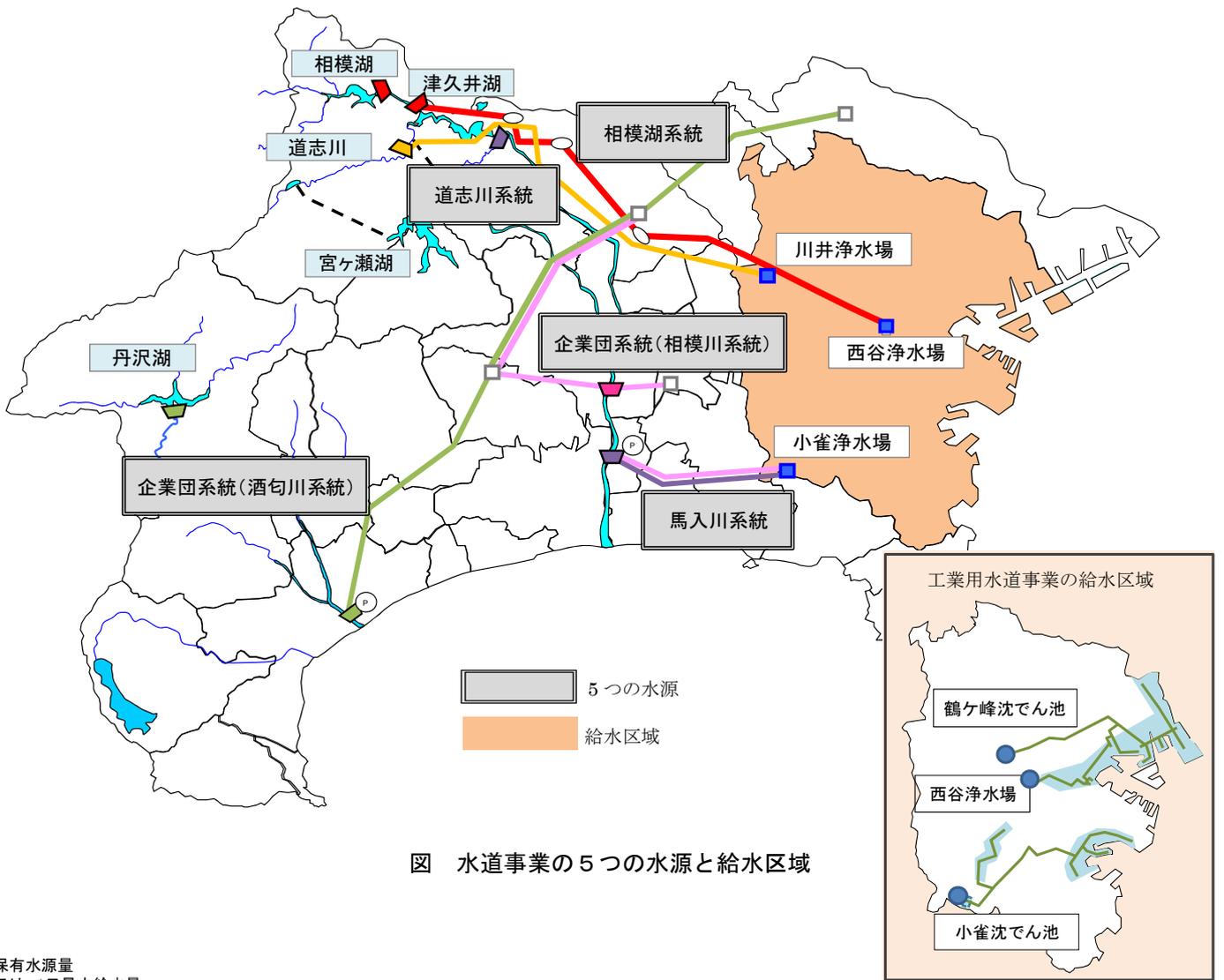


図 水道事業の5つの水源と給水区域

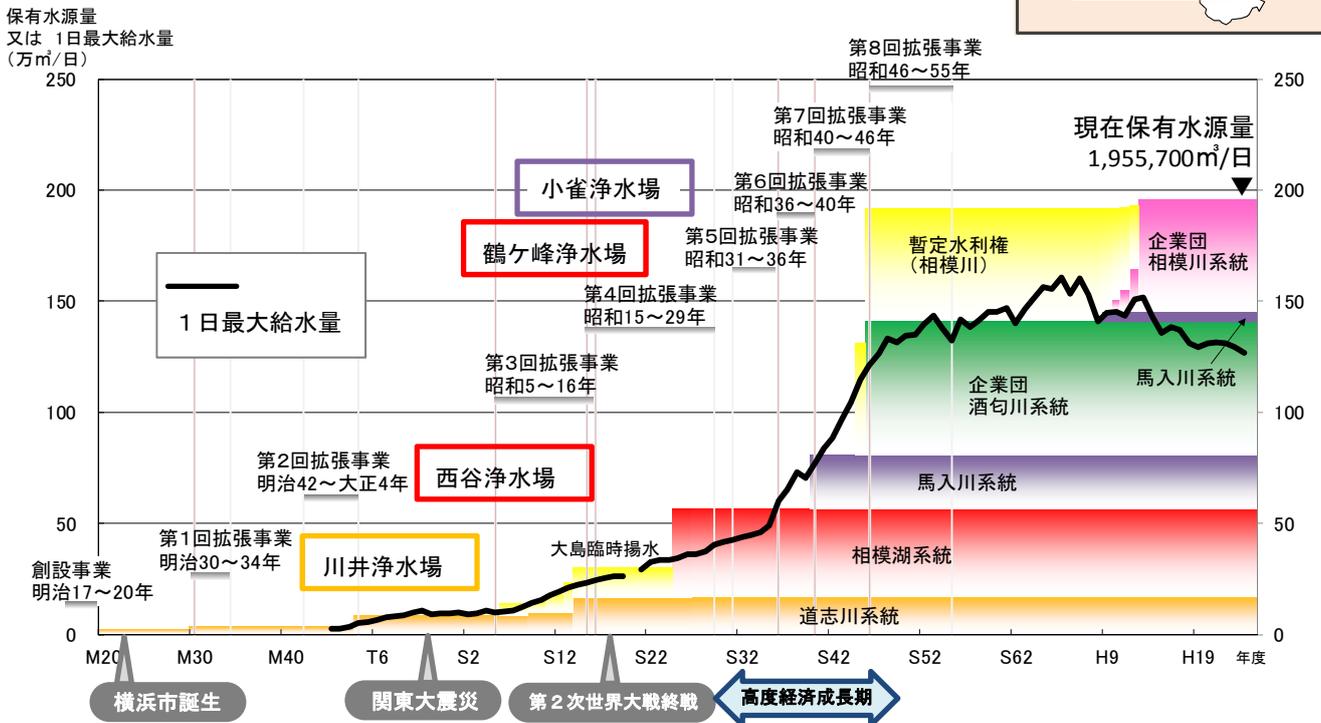


図 水需要と水源開発